

# 相

談が一段落しても、この男性にとって本当の解決とはどのようなことをいうのか、気持ちの中に収めることは難しかった。

40代。独身。しかし未婚のまま子どもまでできた。本当に自分の子どもなのか。その女性は去り、請求されるままに子どもの養育費を払い続けた。これから裁判になるかもしれない。仕事以外の時間の多くはパチンコ。それが平穏な日常だった。時間つぶしの遊びから、儲からないと知りつつ、のめりこんでいったのは、入院した母親の医療費と養育費を支払わなければいけないからだった。追い詰められてサラ金にも手を出した。理由はどうあれ、パチンコと借金という、ありふれた相談内容のつもりだったが…。

## 派手なシャツ着た男に 工業団地の街で会った

首都圏郊外の海に面した町。工業団地がある。暑かった夏の終わりの午後。この男性と最寄りの駅で待ち合わせた。少し早めに到着し、改札口を出て駅周辺をぶらり歩いた。最近はどこでも見かける

# パチンコ依存

第8回

## 新「相談現場からの報告」

柏木 勇一

産業カウンセラー・家族相談士

# 釈然とせぬ養育費払わされ その逃げ道探しだったのか

居酒屋チェーン店とパチンコ店の看板が目に入る。タクシー営業所の看板の方に目をやると、代行と書かれたプレートがついたタクシーがかなりの数見えた。おそらく夕暮れ時になれば、パチンコ店のネオンが点滅し、あちこちの路地裏では赤ちようちんに灯がともり、夜の活気が出てくるのだろう。工業団地で働く人々が、通勤用のマイカーでかけつけ、一日の疲れを癒し、仲間と愚痴を言い合う場でもあるのか。そんな駅前夜の顔が想像できた。

待ち合わせの時間、改札口で待った。といっても初対面なので声もかけられない。約束の2分ほど前に、あらかじめ登録していた携帯電話番号を発信させた。売店の陰の方から、派手な模様のTシャツの上に赤と黒の格子模様のシャツを無造作に羽織った男性が、胸のポケットのスマホを取り出した。濃い茶色の縁のメガネとあごひげが目についた。この男に違いない。携帯電話で話すことをやめて近づき、名前を呼んだ。「わざわざすみません」と男性はちよんと頭を下げ、笑って応じた。人なつっこい笑顔だった。



## 班長だが給料は足踏み 母親の介護で妹と軋轢

男性は、あらかじめ決めていたのだろう。駅構内の階段を降りて小さなロータリーを横切り、車道を渡って二階の喫茶店に向かった。黙っていてもついてくるだろう、というやや自分勝手な歩き方だった。細かい事には無頓着な性格と読んだ。一階がパン屋で狭い階段だったが、店内は思ったより広かった。週刊誌やマンガ本が乱雑にならぶ書棚が目についた。薄暗い店内では制服姿の女子高生が数人円型のテーブルを囲んでいた。特に話をする風でもなく、それぞれがスマホの画面に目をやっていた。「この店はいつまでいても構いませんから」と、男性は語り、窓際の二人席にまず自分から座った。入り口に近いカウンターの向こうから、白いワイシャツ姿の年配の男性が水を持って現れ、注文を聞いた。

減って生産は伸び悩み、給料も足踏み状態という。同じ工業団地の別の会社で総務職をしていた父親は定年後間もなく病死。高齢の母親と同居しているということをまず確認した。妹は近くに嫁ぎ、時々母親の様子をうかがいに来てくれるが、今後、母親の介護が問題になったらどちらが面倒を見るかで言い合うことが多かったことも分かった。妹には二人の子どもがおり、孫の顔を見るのも母親には楽しみだった。

## 他に楽しみがない町で 同僚たちもホール通い

相談したいことは、パチンコと借金という話を電話で聞いていたので、まずその話について聞き出した。すぐその主題に入っていくものと思っていたが、男性はちょっとはにかんだような表情でポツリポツリと話し始めた。

「ええ、まあ、そう話した方が相談に乗ってくれると思ったのです。パチンコも借金もウソではありませんけれど」

「…けれど？」

「ええ、込み入ったいろいろなことがあって。何から話していいの

か」。同じシフト勤務の工場の連中はみんなパチンコに通っています。夜勤明けや休日は大体行きますね。工業団地のほかの会社のみんなども同じですよ。ここではほかに楽しみがないんでね。海釣りに行く人もいますが、結構金がかかるので、よほど好きでない限り長くは続かないようです。駅前にもあったでしょう、パチンコ店が3軒ぐらいあるかな。自分は駅前を利用していません。国道沿いに行くとも軒も並んでいます」

## パチンコのせいなのか それだけではないのか

「儲かっていますか？みなさん」

「さあ、まずダメでしょうね。勝った時の話はみんなしますが、ふだんはあまりパチンコの話には触れません。当たり前のこと、という感覚です。それに、不思議なもので、みんな大体通う店が決まっています、お互いが一緒になることはほとんどないんです。知り合いには見られたくない、という意識はありますね。なんとなく」と、この辺はかなり饒舌に話してくれました。

「もちろん自分も時々勝ちます

よ。だからやるんでしょうが、トータルでは負けています。分かっています。大体一回の料金を決めています。一か月はここまでと。変な言い方だけれど、自分もみんなもすっかりしていると思いますよ。それに最近はいちパチっていう1円パチンコ台も増えてきて、同じ金額でも少しは長く楽しめるようになったかな。最終的には同じなんですけどね。でもパチンコ依存になって生活がめちゃめちゃになった人って、聞いたことがないですね」

「でも、あなたは借金してしまっただ。しっかりしていると云えますか？」

「そうですが：パチンコのせいだけではないんです、これが。いや、やっぱりパチンコかな。そう真面目な顔で聞かれると分かんなくありません」と苦笑いしながら語った。こつちも軽く謝って続けた。

## パチンコ店で声をかけ 惚れたというのか

「何だか複雑そうですね」

ちよつと時間を置いて、男性は笑い顔から一転、こめかみにしわを寄せながら口を開いた。テーブル



ルの上の二つのアイスコーヒーはどちらも少ししか減っていない。氷が溶けて上の方が透明な水状態になっていた。

「簡単に言えば、女です」

「そうですか」何となくそんな感じはしていたが、こちらから質問することは、とりあえず避けていた。

「五年ほど前にパチンコ店で知り合いました。彼女は隣の居酒屋で働いていました。正規の従業員ではなく時々手伝うような形で。結構パチンコの腕は良かったですね。偶然隣り合わせになったことがあって、すごいね、と声をかけたら、好きだし、あんたたちのように欲がないからね、と返事をしてくれました。自分より少し年下かな。本当のところは分からないけれど。男好きの顔をしていました

ね」

「分かるんですか？」

「そりゃ、この年になればね、いろいろありますから」

「なんとなく彼女が通う時間帯が分かったので、いつのまにか合わせている自分がいました。やっぱり惚れたっていうんでしょうかね。その居酒屋にも顔を出そうかなとも。それとなく場所を聞いていました」

### 子供が生まれ女は去り 苦しい金を送り続けて

男性の話をまとめるとこうなる。もともと酒はそれほど強くないから外で酒を飲む機会はあまりなかった。それでも彼女に会いたくて居酒屋に顔を出すようになった。何回か通ううちに親しい関係になった。3年前に男の子が生まれた。

まずいな、と思い結婚も考えた。

年貢の納め時という思いもあった。しかし、彼女はやんわりと断ってきた。最初は子供の世話を頼まれて、何回か彼女のアパートにも通った。やがて、一歳の誕生日を迎えた後、彼女は周りの目が気になるから実家に子供を連れて帰ると言って離れていった。実家がどこにあるか、何度聞いても教えてくれなかった。

まもなく彼女から家に手紙が届いた。住所は書かれていなかった。子供の父親は間違いなくあなただから養育費を毎月振り込むように、という内容だった。金額と振込先の口座が書かれていた。言われるままに支払い続けた。いずれは子供に会いたい。赤ん坊の顔を思い出していた。もちろん出費は痛かったが、自分の責任も感じていた。

### 仕事でミス体調も悪化 はまって消費者金融へ

その頃母親が体調を崩し、入院した。自分の扶養家族になっていたので医療費の多くは健保でカバーできたが、長引くにつれて出費も増えていった。「私の家も大変だから」と言って、金の話になる

と妹は逃げ腰だった。

男性は、儲からないと分かっているはずのパチンコに通う回数が多くなった。ふだんは、行かない夜勤の日の日中も通った。仕事に影響するので、それだけはやめよう、というのが仲間同士の暗黙の決まりごとだったが、「金が欲しい。勝ちたい」という焦りから自ら決まりを破っていった。

案の定と言うべきか、仕事でも考えられないミスもするようになった。同僚からも「どうした。最近おかしいぞ。顔色も悪いし、何かあったのか。体調が悪いなら、少し休んだらどうか」と声もかけられた。自分の状態は自分が一番知っていた。このままでは身体も仕事もすべて台無しになってしまうかもしれない。パチンコを控えよう。そう考えた男性は、当座の資金を消費者金融に求めた。誰にも秘密にできる方策だった。もちろん、1回で済む話ではなかった。

### 「他に男が」と聞かされ 送金やめたが矢の催促

ある日居酒屋に顔を出した。彼女の居場所が分かるかもしれないと思っただけ。年配の女将さんが話し





かけてきた。「あんたもお人よしね。付き合っている男はいたのよ。あんた以外にも。どっちの子供か分からないね」まさか、と思いつつも、別れていった時のちぐはぐな態度から、全く否定できないな、とも思った。楽しい時間を過ごしたことを懐かしく思う一方で、自分の愚かさを後悔もした。

まもなく、また手紙が来た。養育費を値上げしてきた。女将さんの言葉が頭をよぎり、怒りが込み上げてきた。もう払わないぞ、と心に決めた。一か月後、「なぜ振り込まない。弁護士がついた。裁判になってもいいのか。父親の責任を果たさない」という内容の手紙が追い打ちをかけてきた。

「あの女め」という怒りがますます強くなった。脅しのような文面の手紙をよく読めば、ただ金欲しさに脈絡なく書いているのだったが、神経が高ぶったままでは、そこまですみ取することはできなかった。

## 弁護士にさとされて バカなことをしたと

女将さんは、「あの女の後ろにだ

れか男がいて、けしかけてるんじゃないかな」と話した。認めたくはないが、そうかもしれない。さらに女将さんは、「離婚した時には

養育費を払うということはよく聞かれどね。でも結婚もしていない場合はどうなんだろうね」とも語った。その言葉が気になった。そう言われればそうかもしれない、と考えながら、死んだ父親の知り合いを通して弁護士に相談した。

結論は、二人の関係が事実婚と認定されれば、養育費を払う義務があるということだった。しかし、実子かどうか解明しなければいけないケースかもしれない、ということ、相手の出方を待つことになった。仮に養育費を払わなければいけない場合でも、支払う側の収入も考慮されるという弁護士の説明で少し落ち着いていた。この弁護士に任せようと言いつ聞かせた。

亡父の知人も弁護士も、「もう借金はいらないこと、パチンコもほとんどにと誓うこと」を迫った。この説得は当然のことと男性も思った。なぜこんなことになったのか、自分の至らなさを恥じた。四

十にもなってバカなことをしてしまつたと嘆いた。

## パチンコはやめられない 新しい借金はしていない

男性が相談してきた理由は、本当は何だったのか。パチンコはやめてはいない。出費は分かっている、生活の一部として、気分転換のために続けている。しばらくは返済しなければいけないが、新しい借金はしていない。養育費の呪縛からはとりあえず解放された。しかし、今後は分からない。

つまり、男性にとつては平常な生活に戻りつつも、まだあいまいなことが多くある状態だった。自分のことを知らない第三者と話してみたい、という欲求が相談につながったのではないかと考えると、何となくつじつまが合ってきた。

パチンコだけをとらえれば、地獄までは落ちなかった。依存状態といえば言えるが、この男性の場合は、本当の苦労や悩みを紛らすために、言ってみれば、自分を助けるためにパチンコにしがみついた、という解釈も成り立つのではないのか。現に「依存症は自

立心もたらす病」と分析している専門医もいる。人は一人では生きられない。本当に頼りになるヒトがない時、モノに頼るしかない。そこに依存のカラクリが潜んでいるという説である。

裏返せば、気軽に悩みを相談できる状況に置かれていれば、依存症にまで進むことは少ない、ということでもある。これはパチンコに限った話ではない。つけ加えるなら、この男性の場合、みつともない自分〴〵に気づいて、依存してはならないという自立心も働いたのではないか。兄貴分という風情ながら、小心の一面も持った、この男性からの印象だった。

失意と後悔の感情が強すぎて、理路整然と話すことを妨げているのだろう、と相談者のいかにも真面目な表情から読み取ることができたが…。

### 柏木勇一(かしわざい ゆういち)

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業(Employee Assistance Program)でカウンセラー及び研修講師として活動。厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士